Session Ⅱ

わたしの韓国文化

早稲田大学教授　比較文学
武田　勝彦

〈プロローグ〉

考古学者でもないし、歴史学者でもない私が日本文化の源泉を韓国文化に求めるようになった理由は、ごく平凡な生活体験によるものである。北米大陸で初めて日本文学の講座を担当したカナダのトロント大学にいた時、トロントという地名が「人々が寄り集まる場所」であるインディアンの言葉であることを知った。学生時代にインディアン人が石などに刻み付けた素朴な詩に興味を持っていたこともあって、北米の地名に多いインディアンの言葉の意味を辿るようになった。その過程で、イギリスの地名、スペインの地名、フランスの地名などを冠した都市や州の名称を調べてみた。そうこうするうちに、学生たちから日本の地名に関する質問を受けるようになった。その時にふと神の啓示のように私の頭にひらめいたのが、日本は韓国の植民地ではなかったのかということであった。

戦前の皇国史観に基づく「国史」で育った私の世代は、二千六百年の歴史を織り込んだ軍人勅諭も学んでいたし、岩波書店の国史年表で年代も記憶していたので、戦後の動乱期にはさまざまな疑問を自分なりに解決しなくてはならなかった。それが時にはプラスにもなり、マイナスにもなって、韓国と日本の結び付きを考えるようになったわけである。

特にノース・アメリカで日本文学なり、日本文化を教えていると、日本人はホモジニアスな民族であるとの一般論が広く行きわたっていて、その誤解を訂正するのに苦労する。これは前にあげた皇国史観に基づく歴史教育を受けた日本人にも責任があるわけで、現在でも日本人は単一民族であると考えている人が多いからだ。

原日本人という民族が存在したか否かは、今後の考古学、言語学、文化人類学などの研究によって明確になることと思われるが、日本人がホモジニアスな単一民族であるという見方はまず第一に修正されなくてはならない。そうしないと、日本人の日本観はいうまでもなく、外国人の日本観も従来の皇国史観から解放されないからである。

日本人がいくつかの民族なり人種がまざり合っていることは、現在でもアイヌ人、オロチョン人、ギリヤーク人、沖縄人、韓国人、中国人の血の流れていることからも、簡単にわかる。三千年、四千年も前のことになると、専門家の研究成果に頼るほかに道はないが、韓半島から渡来した人々、シベリアから北海道に渡り、さらに本州に入った人々、黒潮に乗って南の島々から渡来した人々などが、何千年の歴史の中で次第に同化し、あたかも一民族であったと妄信しているに過ぎない。

そこでここでは特に韓半島との結び付きに就いて考えてみたいと思う。考えるといっても先人の研究を土台にしながら、私なりに韓国文化の受容を具体例をあげ、氷山の一角だけでも明瞭にしてみたい。最後には現段階で私なりの綜合を試みようと思う。

〈地名の由来〉

日本の古い都の話をするとなると、先ず奈良をあげることになる。710年（和銅3年）に元明天皇が奈良に都を定め、784年（延暦3年）まで平城京として天平文化が栄えた。この地名はこの時作られたものでなく、既に以前から命名されていたことは額田王の名歌を読んでもわかる。

> 味酒（うまさけ）　三輪の山　あをによし　奈良の山の　山の際（ま）に　い隠るまで　道の隈（くま）　い積るまで　つばらにも　見つつ行かむを　しばしばも　見放（さ）けむ山を　情（こころ）なく　雲の　隠さふべしや　（「万葉集」巻117）

この長歌は667年（天智天皇6年）に作られたものと考えられるが、この時額田王は奈良をごく単純に地名と考えていたのだろうか。それとも、私がトロントを人々の集う所と捉えたように奈良の意味を心の片隅に置いていたのだろうか。古代韓国語の「ナラ」は都、平宮、平、国などを意味していた。現代でも「ナラ」といえば国を意味するのだ。額田王は馴れ親しんだ大和の国を去って遷都のために近江へ向かう途中である。この時は奈良はまだ都になっていな

い。したがって、住み馴れた国を後にしてという気持が働いていたのだろう。

植民者たちは原住民の地名がある場合は別として、自分たちの母国語を用いて新しい地名を作ることが多い。奈良はその好例ではなかろうか。韓国から当時としては高級な技術や生活の知恵を持って、日本に来たパイオニアたちは、おそらく長い歳月をかけて瀬戸内海沿いに大阪にやって来たのだろう。あの肥沃な淀川河口に定住せず、険しい山を越え大和地方へ移り住んだのはなぜだろうか。おそらく当時の勢力で大阪平野に居すわると、ジャパニーズで、インディアンから襲撃を受けるおそれがあったのではなかろうか。

この植民者集団の長が神武天皇であったかどうかは別として、四方を山で囲まれた守りに強い大和地方へと道を辿ることにしたのであろう。ここにどれほど住みついたかは、まだ明確にすることは出来ないが、移民者たちは母国語で「ナラ」と呼んだに違いない。この地域に「奈良」の漢字があてられたのはそのためであろう。

奈良の地名は飛鳥とも関連するが、「万葉集」では「明日香」の字があてられている。この音も韓半島南部にあった古代の国、安羅と無縁ではあるまい。ただし、安羅は安那、安耶、綾とも表記される。また、大阪府、三重県にも飛鳥があり、広島県には安宿と書いて「アスカ」と読む地名がある。宿の韓国語の発音は「スカ」に近い。また、「宿」は「村」（韓国語の発音はスク）の音に近い。したがって、安（羅）の村の意で安羅人の住む村のことではなかろうか。なお、韓国語の羅は国の意味である。この安宿近くには大和、三和など奈良に因む地名もあるし、郡名には「世羅郡」がある。

ついで春日神社についても一言触れて置きたい。「春」をなぜ「カス」と読むのかは知らないが、「十日」「二十日」「三十日」などの「日」を「カ」と読むことを思い出せば無理のない読み方だ。古代韓国語では「日」は「カ」と発音されていた。

ここで一度「万葉集」の歌の作者、額田王に戻ろう。井上靖氏は優れた歴史小説「額田王」を書かれ、巫女説を打ち出している。この「ヌカタ」が韓国語に由来するとの金思燁（キムサヴヨブ）氏の意見を読んだ時、井上氏の洞察力に驚いた。この「額田」は古代韓国語の地名「湿田」（発音はヌカ・パタ）に由来するとのことだ。現在でも、日本語では「雨が降って、道がぬかる」とか、「ぬかるみ」というくらいである。

〈ことばの問題〉

韓国語と日本語の関連を論じる場合に、日本の言語学者は系統論的な発想で取り組むが、ここではごく身近かな言葉から考察したいと思う。最近、ソウル大学校の李基文教授の「韓国語の形成」（成甲書房）を読んだ。李教授は欧米の学者や日本の学者の諸説を巧みに整理されて、古代日本語と韓国語に関して　親族関係があることをアルタイ諸語を媒介として立証された。これは言語学者の細密な研究成果として韓国語と日本語を研究する上で貴重な存在である。

アマチュアとしての私が考えていることは、日本で漢字を音標文字ふうに用い出したのはなぜであろうかという素朴な疑問だ。たとえば「久羅下那洲多陀用幣流」（くらげなすただよへる）とか「在祁理」（ありけり）などは、一音節一字表記である。このような表記が成立し得たのは、漢字の意味を理解し得ないインテリが多かったからではなかろうか。

「天地初発之時」（あめつちはじめてひらけしのとき」のように、漢字の「天」「地」あるいは「初」「発」などが、その意味を表わしているものもある。これは当時のインテリが学び得た漢字であるわけだ。このように考えると、韓国語と日本語に流れ込み、溶け込んだ漢字のうち、どのようなものが、いわゆる正字として用いられるようになっていたかを研究することによって、両者の関連を考える一つの補助線が可能になると思う。

日本人はフランシスコ・ザビエルらがキリスト教文化をもたらした時も、江戸末期から明治の西欧文化輸入の時も、そして現在ですらも、訳語が見つからない場合は平仮名、片仮名で原語を表記して、なんとか取り入れてしまおうとして来た。そのために、原語の意味とかなりかけ離れた受け取り方をしたものも少なくない。文芸用語の「浪漫主義」などはその典型的な例といえよう。

さて、ここで日本語というより〈やまと言葉〉といわれる古代の日本語に出て来る地名、人名、官職名、あるいは文化現象に関する用語を、韓国語というよりも、百済語、加羅語、扶余語、新羅語、高句麗語などとの連関で捉えてみたい。

関東文化圏の関所となる箱根という地名一つにしても、「箱」は韓国語では「神聖な」の意味であり、「根」（ネ）の音は「峯」を意味する。すると、箱根は〈神聖な峯〉を意味するわけだ。ここにある箱根権現は実は韓国の神を祭っている神社である。この箱根を下り、旧東海道を東京へ向って進むと、大磯という町がある。これは「いらっしゃい」との歓迎を意味する韓

国の言葉の読みと一致する。ここには高麗神社があることも忘れてはならない。

日本の山々の名をちょっと思い出していただくことにしよう。「白山」(はくさん)「恐山」(おそれさん)、「高野山」(こうやさん)、「富士山」(ふじさん)などと〈山〉は「サン」と発音されることが普通だ。千葉県の「鋸山」(のこぎりやま)のように〈やま〉と発音されるケースの方がはるかに少ない。これはなぜだろうか。私のようにアメリカ人に日本文学を教えたり、日本語を指導したりしていると、こういう素朴な質問を受ける。それによって新しい発見があるのだ。

実は〈山〉を〈サン〉と発音するのは、韓国語で〈サン〉というからだと思う。日本の山で〈サン〉と発音されるのは、韓国からの移民たちがその名称を生みだしたからだと思う。高野山は高麗山の訛りであるともいわれるくらいだ。

〈山〉を「サン」「ヤマ」と読む他に、日本では「大山」(だいせん)とか「中山道」(なかせんどう)という読みもある。この「セン」は新羅では〈山〉を「セン」と発音していたことと思い合わすと、これまた符合して来る。日本一の山といわれる富士山の名称に就いても長田夏樹氏は、韓国語の〈火〉の〈ブ〉と、アイヌ語の「火」の発音の〈ブチ〉の〈チ〉が合して〈フヂ〉になったと説かれている。

日本人は現代でも和製英語を創り出すのが巧みだといわれている。「ロマンス・カー」「ラスト・ヘビー」「エレヴェーター・ガール」「バンスト」など実に多くの分野で新語を作っている。明治生まれの「宗教」「自由」「情報」なども漢字をあてているとはいえ、原語の意義と微妙なズレを作っている。こうした例は古代から見られたのだ。例えば、日本の伝統といわれる「刀」(かたな)はやまとオリジナルの言葉だろうか。「な」は韓国語の刃をあらわす「なル」から生まれたもので、これが片一方だけの刃(な)であったから李教授によると、ツングース諸語の Kalta とも、蒙古語の「半」の galtas とも対応するとのことだ。

この項の最後に、李教授の示された古代日本語と韓国語の代名詞の対応関係を示しておく。

古代日本語	韓国語
na,ana	na(わたくし)
ware	uri(われ)
önö,na	nə(きみ)
kö	g(それ)
i	i(これ)

〈倭と日本〉

現在、韓国文化研究所院院長をしておられるはずの金廷鶴教授(東国大学校)の書かれた「百済と倭国」は私に感銘を与えた書物である。本書の「あとがき」に次のような一節がある。

本書が取扱った時間的範囲は上記のように百済の滅亡までである。百済は660年に唐と新羅の連合軍によって亡んだが、その遺民が日本の援軍とともに白江(白村江)の戦において最後を遂げたのは663年であるので、この時までを取扱った。故にこの時限は「日本」という国号が初めて使われたと思われる670年乃至703年より少し前までになる。本書の書名を「百済と倭国」としたのは出版社の選択によるものであるが、それは本書が丁度「日本」なる国号が使われる直前までの時期――つまり倭国との関係を取扱ったからである。

「三国史記」によると、670年に「倭国はみずからの〈倭〉という名称を恥じて、この年、日本と改称した」と出ている。この史実は中国の文献からも間違いがないと思われることで、私は日本史を取り扱う場合、重視すべきことだと考えている。こうしたことを無視した日本人論や日本文化論は私には納得しかねるのだ。歴史年表なども倭から日本へと国号が変更したことを記載することで、日本人により正しい日本文化への認識を持たせられることになるのではないかと思う。

さて、国号を倭から日本に変更したと思われる 670年頃はどんな時代であったのだろうか。詳しく文化史的に知りたい方には井上靖氏のこの稿の最初に引用した「万葉集」の歌を額田王が作ったのが 667年のことである。日本の多くの歴史の書物では、近江遷都、翌 668年、皇太子中大兄皇子即位、 669年、中臣鎌足内大臣となり藤原姓、河内鯨らを唐に派遣、 670年、戸籍庚午年籍を作る。

ここまでは順調だが、671年12月に天智天皇が没すると、翌年672年には壬申の乱が起こり、大海人皇子が近江に入り、大和では大伴氏が呼応して立ち、大友皇子は自殺し、都は近江から

飛鳥浄御原に移り、673年に大海人皇子が即位して天武天皇となる。

井上氏は小説家として額田王に焦点をあて、この間の人間関係を実によくまとめておられる。氏はこの小説に関連して三つの論考を書いておられるが、「天武天皇」には見逃せぬ記述がある。

> 考徳・斉明・天智・天武・持統といった時代は、古代国家の成立期であり、いってみれば日本という国の、まだどのようにかたまるかもわからない青春期にあたる。青春のエネルギーが互いにぶつかり合い、砕け、流れている。流れの方向はまだ決まっていない。黒々としたエネルギーがいたるところで渦を巻き、逆流したりしている。それが、一本の方向をもった大きい流れとして見えてくるのは、後代になって、このころを振り返ってみたうえでの話である。

この背後には韓半島から移住し、各地で権力を持っていた人々の力関係が葛藤し合っていたのである。アメリカ史をひもとく時、私たちはWASPの一団とカトリック教徒、フランス、スペイン系移民、さらにユダヤ教徒が微妙にからみ合っているのを見出すが、こうした見方をしなくてはならないのではなかろうか。中大兄皇子、天智天皇が重く用いた中臣鎌足は加羅系の出身である。また、近江辛崎への遷都の背後には、ここに新羅系の権力者が住んでいたことを見逃せない。大和を去って近江へ都を移したことは百済滅亡後の致し方ない政策ではなかったのか。これは666年の「日本書紀」の記述「百済の男女二千余人を以、東国に居く」と合わせて考えたい。百済滅亡（663年）後、この地に逃れて来た人々を政府が保護していたが、この年から自活の道を開くようにして東国に旅立たせたのである。百済系の蘇我氏滅亡の645年以来、百済勢力は衰えていたが、中大兄皇子としては、このあたりで百済人対策を建てた後に、近江への遷都の手を打ったと見るべきではなかろうか。

671年に大海人皇子が吉野に引退して、二カ月後に天智天皇は死亡する。「十二日の癸亥の朔乙丑に、天皇、近江宮に崩りきしぬ」と「日本書紀」に書かれている。近江では大政大臣となっていた大友皇子が政権を担当することになったが、翌年六月になると大海人皇子は吉野から大和、伊勢を抜け、美濃に出、ここで東国の豪族の協力を得て近江を攻め落とすことになる。一方、大和では百済系の豪族たちが大海人皇子に呼応して立ち上ったのであった。

七月には大友皇子は自殺し、大海人皇子は重臣らを処刑し、冬になると飛鳥浮御原に都を移

し、その翌年即位して天武天皇となったのであった。歴史にはいろいろな読み方があり、私のような解釈を否定する要因も皆無ではない。しかし、日本という国名をどこでどう導入するかは重要な問題であり、今後の研究のためにも提唱しておきたい。

〈エピローグ〉

私が主張したいことは次のように要約できると思う。

一、何よりもまず身近かなことから、できる限り、客観的に探求し、人名にしろ、地名にしろ、その源泉を明らかにすること。

二、皇国史観だけでなく戦後の極端な唯物史観にもとらわれず、歴史を冷えた眼で見直すこと。

三、東アジアの諸文献を参照し、日本ないしは日本人がどのあたりから定着したかを考え、独断的な均質単一民族説とそれにまつわる文化概念を盲信せぬこと。

しかし現況では日本は一つの独立した国であり、そのルーツがどうであろうと、日本人は世界の平和に寄与するような道を歩むべきである。その過程で特に明治以降の一部の誤まった国粋主義的主張を是正すべきだと思う。その中でも韓国に対して作りあげたイメージを是正する努力が最も重要である。人間は個人としても国家としても誤謬を犯すことはある。しかし、それを認めたら、悔い改める勇気を持たなくてはならないのである。